

要なる位置は今更繰り返す迄もないが、美術とか音楽とか、其他種々の方面からも、支那の文化に關係する所少からなかつたと思はるゝ此等の國の人種が、かく文書の上から明らかに定められ、勿論從來とても同様のことを推定した人は多くあつたし、またそれが頗る合理的であつたにしても、唐代迄はアーリヤ種の文化が葱嶺以東の地に榮ゐてゐたものであることを決定的に知ることが出来るに至つたのは誠に快心のことである。

此等の研究は前述の通り既に三四年も前に發表せられたもので、今日これを紹介するのは甚だ時機を失した譯であるが、然も案外人の注意を惹かずに過ぎて居るやうであるから、後れながらこゝに其の大體を紹介することにす

Lévi 教授の論文は一九一三年の *Journal Asiatique*, Septembre-Octobre 號に

Le "Tokharien B", *Langue de Koutcha*

と題して掲載せられたものである。

氏の資料に用いたのは一九〇七年の初めに、Pelliot 氏が庫車の附近 *Saldirang* 驛近くの昔の烽戍の廢墟から獲た多くの木牌であつて、大概長さは八一—一六センチメートル、巾は四—一〇センチメートルのもので、四方にV形の切り込みが施してある、その一方の面にブラーフミー文字でB種のトカラ語が書きつけてあるのであるが、Lévi 氏の研究によると、それは大概通行免狀で、出發または入國の隊商などに交附したものである。氏は先づこのB種のトカラ語なる名稱を龜茲語 (*Koutchéen*) と更めねばならぬことについて論じて居る。

『元來このBトカラ語なる名は、F. W. K. Müller 氏の附けた所であるが、これは假定の名稱でまた一時的の